

## 「ただひとつのパン」

マルコの福音書 8:11~21

### はじめに

前は「四千人の給食」の奇蹟について学びましたが、この奇蹟は主に異邦人の教会に対する神のご計画を表したたとえ「型」として解釈することができ、世の終わりの大患難が起こるその前に、イエシュアが空中に現れ、教会が天に引き上げられるという「イエシュアの空中再臨、教会の携拳」の出来事を指し示していることを述べました。今日の箇所はその続きとして記されている箇所ですから、その流れを汲みつつ読み解いてみたいと思います。

### 1. しるし

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:11 すると、パリサイ人たちがやって来てイエスと議論を始めた。彼らは天からのしるしを求め、イエスを試みようとしたのである。

8:12 イエスは、心の中で深くため息をついて、こう言われた。「この時代はなぜ、しるしを求めるのか。まことに、あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」

8:13 イエスは彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ行かれた。

イエシュアの空中再臨、教会の携拳の視点から今日のこの箇所を捉えるならば、ここにはその携拳の際に、それを目撃しながらも地上に取り残されるイスラエルの民、ユダヤ人の姿と、彼らを残して再び去って行かれるイエシュアの姿が表されていると考えられます。記されている出来事としては、パリサイ人たちがイエシュアに「天からのしるし」を求めるという内容のものですが、この「しるし」のことをヘブル語でオート(אוֹת)と言い、最初の言及は創世記 1:14 になります。

【新改訳 2017】 創世記

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

1:15 また天の大空で光る物となり、地の上を照らすようになれ。」すると、そのようになった。

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

これは神の天地創造の第四日の出来事を記したのですが、ここに聖書で最初の「しるし」、本来のオートがあります。このようにオートとは本来、「定められた時々のため」に「天の大空で光る物」のことを指し示していると言えます。神のご計画における「光」とは、聖書全体から見てやはり究極的には神の御子イエシュアを指し示していると考えられます。そのイエシュアが「天の大空」に「定められた時」に現れるのがイエシュアの空中再臨です。そして「昼と夜を分け」るように、イエシュアを信じる者とそうでない者とははっきりと分ける出来事が教会の携拳です。ですからオート「しるし」とは本来、イエシュアが

天から空中に現れる出来事、再臨の事実を指し示した言葉であると考えられます。前回も述べましたがこのイエシュアの空中再臨はキリストすなわちメシアの花嫁と呼ばれる私たち教会を天に引き上げるためのものです。ですからこのパリサイ人たちのようなユダヤ人、またイエシュアを信じない者たちには与えられません。その事実がイエシュアがパリサイ人たちに対して「あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」と答えられたという記述には表されていると考えられます。

ちなみに「しるし」オートの最初の言及で「神は二つの大きな光る物を造られた」ともあり、これはイエシュアの再臨が二度あること、すなわちこの「空中再臨」と、悪を滅ぼし、神の国を建てるため最終的にこの地上に降りて来られる「地上再臨」の二つの出来事を指し示していると考えられます。またさらに言うと「星も造られた」ともありますが、これは夜空に不思議な星が現れ、また御使いの軍勢が現れたあのイエシュアの初臨、降誕の出来事を表していると考えられます。いずれも大空、空中に現れるイエシュアのオート「しるし」としての光る物です。

## 2. パン種

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:14 弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、一つのパンのほかは、舟の中に持ち合わせがなかった。

8:15 そのとき、イエスは彼らに命じられた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」

さて、場面は変わってここから舟の中でのイエシュアと弟子たちだけの様子が描かれています。弟子たちが「パンを持って来るのを忘れ」たとあります。前回の四千人の給食の場面で、群衆全員が満腹してもなお、パンは七つのかごいっぱい余っていました。しかしなんと弟子たちはそれを持って来るのを忘れたというのです。彼らは「一つのパン」しか持って来なかったともあります。「持って来るのを忘れた」とあるので、余った七かごのパンも配り切ってしまったというわけではないようです。状況としてはこれは大失態です。この後弟子たちの間で、なぜあの余ったパンを持って来なかったのかということで議論、口論、要するにケンカが起こります。ここでイエシュアはなんと不可解な、非常に短いたとえを話されます。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」これは一体どういう意味でしょうか。弟子たちは「パン」ヘブル語でレヘム(לֶחֶם)についての話をしていましたが、イエシュアは「パン種」ヘブル語でセオール(סֵאוֹר)という言葉を用いて話されました。一見状況とは食い違うようなイエシュアのたとえですが、ここにもやはり「神の国」についてのご計画が表されています。まずはイエシュアが用いられた「パン種」セオールについての最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】 出エジプト記

12:14 この日は、あなたがたにとって記念となる。あなたがたはその日を【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。

12:15 七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日に、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

これはイスラエルの三大祭りの一つである過ぎ越しの祭りの、その直後に続いて行われる「種なしパンの祭り」を行うことについての御言葉ですが、ここに聖書で最初の「パン種」セオールがあります。「パン種を取り除かなければならない」とあるように、セオールとは本来、取り除かれること、「イスラエルから断ち切られる」存在を指し示す言葉であると考えられます。イエシュアはこのセオールを「パリサイ人のパン種」また「ヘロデのパン種」というふうに使われました。パリサイ人はイエシュアを信じないイスラエルの指導者たちであり、またヘロデは異邦人でありながらイスラエルを支配する王でした。イエシュアが建てようとしておられる「神の国」にこのような存在はすべて取り除かれ、また断ち切れ、決して入ることができないということイエシュアはたとえを用いて言い表しておられるのだと考えられます。

またヘブル語の視点で考えるならば、イエシュアが「パリサイ」、「ヘロデ」この二つの名を用いられたことにも意味を見出すことができます。パリサイとは「明らかにする、はっきり宣言する、刺す、分離する」などの意味のパーラシュ(פָּרַשׁ)が語源となった名です。

#### 【新改訳 2017】レビ記

24:11 そのとき、イスラエルの女の息子が御名を汚し、ののしったので、人々はこの者をモーセのところに連れて行った。彼の母の名はシェロミテで、ダン部族のディブリの娘であった。

24:12 人々は【主】の命が彼らにはっきりと示されるまで、この者を留置しておいた。

24:13 【主】はモーセにこう告げられた。

24:14 「あの、ののしった者を宿営の外に連れ出し、それを聞いたすべての人がその人の頭に手を置き、全会衆が彼に石を投げて殺すようにしなさい。

モーセがいた時代、イスラエルの中でシェロミテという女の息子が主の「御名を汚し、ののしった」とあります。その結果、「【主】の命が彼らにはっきりと示される」ことによってこの女の息子は殺されました。ここに聖書で最初のパーラシュがあり、この言葉には本来、主の御名を汚す者、ののしる者は必ず殺される、滅ぼされるという意味があると考えられます。このような者は決して「神の国」に入ることはできず、必ず取り除かれる、イエシュアはそのようなメッセージを込めてこの「パリサイ人のパン種」というたとえを用いられたとも考えられます。

そして「ヘロデ」という名についてですが、この名はギリシャ語で「英雄」という意味のヘーロース(ἥρως)が由来とされていますが、ヘブル語で表記すると(סֵרַדוּדָה)このようになり、ここに「降りる、下る」という意味のヤーラド(יָרַד)を見つけることができます。この最初の言及は創世記 11:5 です。

#### 【新改訳 2017】創世記

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで【主】が全地の話しことばを混乱させ、そこから【主】が人々を地の全面に散らされたからである。

これは有名な「バベルの塔」の出来事です。バベルの人々は自分たちの名をあげるため、天に届く塔を建て、神のようになろうと企てました。しかし神である主は「降りて来られ」その企てをやめさせたとあります。ここに聖書で最初のヤーラドがあります。このようにヤーラドとは本来、自分を神とする、神のようになろうとする人の企てをやめさせる、終わらせるために神が降りて来られるという意味があると考えられ、イエシュアの地上再臨の事実がこれに結びついてきます。終わりの時代、自分を神とする反キリストが、まさにこのバベルの国を建てようとします。しかし地上に再臨されるイエシュアがこれをやめさせ、滅ぼします。「ヘロデのパン種」というイエシュアのたとえには、そのような神のご計画が表されていると考えられます。

そしてイエシュアは弟子たちに「くれぐれも気をつけなさい。」と命じられましたが、ここに使われているヘブル語、シャーマル(שמר)は本来、神がエデンの園に置き、そこを「守らせる」人を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

「神の国」とはこのエデンの園を再び地上に復興させることですから、イエシュアは「神の国」を守る、治める者として、パリサイ人やヘロデにたとえられたような者たちではなく、この弟子たちを選んでおられることがこの「イエスは彼らに命じられた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」という記述には表されていると考えられます。

### 3. 一つのパン

【新改訳 2017】マルコの福音書

8:16 すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた。

8:17 イエスはそれに気がついて言われた。「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。

8:18 目があっても見ないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。

弟子たちの議論が始まります。彼らはみな「自分たちがパンを持っていない」と言っていますが、果たして本当にそうだったのでしょうか。確かにかごいっぱいパンはありません。しかし先ほどのマルコ 8:14には彼らには「一つのパン」があったことがはっきりと記されています。最初に述べたように、この箇所は前回述べた四千人の給食の奇蹟が行われた直後の出来事なのです。つまりイエシュアがたった七つのパンで四千人もの群衆を満腹させ、なお七つのかごいっぱいパン切れが余ったという奇蹟です。その驚くべき御業を、弟子たちはつい先ほど体験したばかりでした。それなのになぜ弟子たちはこの「一つのパン」

でもイエシュアはたった 12 人しかいない自分たちの腹を満たすことができるという信仰を持つことができなかつたのでしょうか。「まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。」  
「目があっても見ないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。」  
という、彼らに対するイエシュアの叱責の言葉がたたみかけられています。

しかしここでイエシュアは、ご自分にはパンを増やすような奇蹟を行う力があるのだということを主張、強調したかったわけではありません。弟子たちが「自分たちがパンを持っていない」パンはない、と言ってこれに目を留めることができなかつた、「舟の中に持ち合わせ」ていた「一つのパン」に目を留めさせたかったのです。ではこの「一つのパン」とは何でしょうか、何を指し示しているのでしょうか。それはもちろん「天からのまことのパン、いのちのパン（ヨハネの福音書 6:31~35）」と言われたイエシュアご自身です。そしてこれがパリサイ人たちが求めたが与えられず、弟子たちへのみ与えられたオート「天からのしるし」です。しかしこの時の弟子たちにはその意味が理解できていなかったのです。

#### 4. イエシュアだけ

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:19 わたしが五千人のために五つのパンを裂いたとき、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」

8:20 「四千人のために七つのパンを裂いたときは、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

8:21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

イエシュアの問いに対し、弟子たちは「十二です。」また「七つです。」と、かつての奇蹟をしっかりと覚えていました。状況としては、弟子たちは七つのパンが入ったかごを忘れて来てしまったと思っていたのですが、弟子たちが本当に忘れていたものは、その時彼らの目の前にあった「持ち合わせ」ていた、この「一つのパン」だったのでした。

「十二」は「神の国」において十二部族として回復されるイスラエル、そして「七」は前回述べたように、イスラエルと平和の絆で結ばれる異邦人すなわち私たち教会を表しています。しかし重要なのは、目を留めなければならないのは、この「一つのパン」に指し示されたイエシュアなのです。なぜならこの御方なしにはイスラエルの十二部族の回復も、また教会の救いも携拳も、そして「神の国」も、神のご計画は何一つとして成し遂げられないからです。つまりイエシュアが、ただこの御方だけが神のご計画のすべてを成就、完成させることがおできになるのです。

神のご計画を知り、これに目を留めることは良いことです。しかしそれを一体誰が実現させるのかという、神のご計画を実際に完成させる御方を知ること、覚えることはもっと重要です。それは私たち教会でも、イスラエル、ユダヤ人でもないのです。ただイエシュアだけが、神の御子メシアであるこの御方だけがそれを成され、聖書に示された通りに成し遂げられるのです。私たちが聖書を学び、またイスラエルについて学ぶのは、そこに指し示されている、表されているイエシュアの姿を見出すためです。律法、儀式、預言者、幕屋、祭り、歴史など、イスラエルについてのこれらの聖書の記述には、イエシュアを指し示すもの、その存在と働きを表すもので満ちています。だからこそ私たちは、そこに示されたイエシュアの姿

を追い求め、探し求めてイスラエルについての聖書の御言葉を学ぶのです。それが私たち教会の取るべき聖書を学ぶ姿勢です。イエシュアご自身がこう言っておられます。

【新改訳 2017】ルカの福音書

24:27 イエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書

5:46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

ですから私たちは常にイエシュアを求めて聖書を学ばなければならないのです。今私たちは毎週木曜日に創世記の1章の啓示を丁寧に学んでいますが、これはあくまで私の結論ですが、天も地も、光も闇も水も空も、星も種も生き物も、そして人もすべてイエシュアです。つまりこの御方がどのような御方で、何を成されるのかということが啓示されているのが、天地創造の御業と呼ばれているあの記述です。確かにモーセはイスラエルの民に向けてこの書を含むモーセ五書、トーラーを書きました。しかしそれはイスラエルの民に自分たちのことを教えるためではなく、神の御子メシアを、イエシュアを啓示するために、そしてイエシュアを待ち望ませるために、御父である神が彼に書かせたのです。上記のイエシュアの御言葉がそれをはっきりと証言しています。

イエシュアは「まず神の国と神の義を求めなさい。(マタイの福音書 6:33)」と言われました。ですから私たちは「神の国」を求めますが、一体それを誰によって求めるのでしょうか。これもまたイエシュアによって求めるのではないのでしょうか。それが「イエシュアの御名によって祈る」ということではないのでしょうか。このように、聖書を学ぶだけでなく祈りにおいてもイエシュアの存在が重要なのです。

また私たちは今、特にイスラエルについて、またヘブル語の視点から聖書を学んでいますが、もしそこにイエシュアを見出すことをしなければ、この御方に目を留めることをしないならば、今日の箇所に記載された弟子たちのように「まだ分らない」「悟らない」「心を頑なにしている」「目があっても見ない」「耳があっても聞かない」「覚えていない」「まだ悟らない」者のような状態にあるということを知らなければなりません。なぜならイエシュアのいないイスラエルは不完全な、いや壊れた、死んだイスラエルであり、イエシュアを指し示さないヘブル語はただの古い言語、いや滅びた国の言葉となってしまうからです。死人と死人を生き返らせる御方と、どちらが重要か、どちらに目を留めるべきか、考えるまでもありません。

やがて私たち教会は、イエシュアによって携挙され、天に引き上げられます。そしてイエシュアによって地上の悪は一掃され、イエシュアによってイスラエルの民は集められ、イエシュアによって神のご計画の完成である「神の国」はこの地に建てられ、イエシュアによって治められ、すべてのものはイエシュアにのみひれ伏すようになるのです。「ただ主イエシュアだけ」という、私たちはこの一事を忘れてはなりません。ただ「一つのパン」である神の御子メシアなるイエシュア、これからもますますこの御方に私たちの心と思いと向けつつ聖書を学んでまいりましょう。そして御霊とともに祈りましょう。ただ「主イエシュアよ、来てください」と。